

河野 眞 著

## 『ファウストとシンデレラ

——民俗学からドイツ文学の再考に向けて』

大 野 寿 子

「ドイツの人間像」ともみなしうるゲーテの「ファウスト」と、「玉の輿」思考の代名詞あるいは「ドイツ民族の運命」とも称されるグリムの「シンデレラ」。伝承に依拠する両テキストの、生成論および受容論を主軸にすえた通時的検証と研究史の批判的考察を通じ、双方ともに「信仰」をめぐる語りの「世俗化」であることを、政治情勢や社会情勢にも目を配りつつ論じたのが、全619頁にも及ぶ本書である。

昔話<sup>メルヒエン</sup>は地域的・時代的拘束性が低く、その様式化・固定化された純粹、単純、素朴な語り口により、「民」<sup>フォルク</sup>の心に共鳴しうる意味での普遍性を獲得する。ヘルダーの援用ともみなしうるグリム兄弟のこのポエジー観を基盤としつつ、「共同体の歌心」あるいは「民衆詩心」(Volkspoesie)容認の背後に潜む、個性原理への反発というロマン派的感性の存在を著者はみのがさない。このような語りの「脱個性化」は、科学技術が発展する現代でも、「道具立て凍結の法則」(H・パウジンガー)として繰り返される。つまり、生活空間の膨張により狭域性を維持できなくなった昔話<sup>メルヒエン</sup>は、特定の土地伝承から遊離するだけでなく、その聞き手側や読み手側がむしろ、地域性を喪失した話の方にリアリティを感じ始めるのだ。さらにバラードの普遍的特性についてもその本質は、ある特定の個人、身分、地域、環境を脱し獲得された「民」<sup>フォルク</sup>なる「個体の理解を超えた紐帯」および「恒常的人間像」にあるという。この「脱個性化」と「民衆化」の論理が本書の通奏低音であり、「普遍化」、「理念化」、「世俗化」、「崩しと送り継ぎ」、「一般化」等と巧みに

置き換えられて響くところが小気味いい。

そもそも19世紀末より日本の民俗学にも影響を及ぼした比較民話学は、グリムの「シンデレラ(=灰かぶり)」の骨子を「継子話」および「超自然的援助」譚とみなし、ペロー(フランス)やバジール(イタリア)等の類話群との比較検証を常とする。それに対し著者はM・ハインの説に依拠し、「シンデレラ」話の骨子はむしろ、低身分の者が立派な行為故に身分以上の高い評価に恵まれる「玉の輿」という夢想にあると説き、その原型とされる16世紀頃の話をも二つ挙げている。一つは、Eschengrüdelという呼び名が検出されるという意の「灰かぶり」譚、もう一つは、教導(教化)文藝の中の「聖職者のような下婢(=祈る女中さん)」という話種であり、双方が中世末の説教師ガイラーにより結合し、ヨハネス・パウリ『放言と至言』(1522)に収録されたという(A・シュパーマー)。特に「祈る女中さん」は、磔刑のキリストの傍らに隠棲者と天使を、もう片方には女中を描いた「念持画片」(Andachtsbild)という図像を伴っており、この図像は巡礼地における参拝者への護符として、19世紀後半の印刷技術発展と共に、昔話<sup>メルヒエン</sup>とは別の環境で流布した。また、日々の仕事をキリストの受難と重ね合わせる「祈る女中さん」の内容展開は、聖ブリギッタ等13世紀頃の女性神秘家による霊視譚へと遡り可能であるという。「民衆詩心」の一つである「シンデレラ」話はしたがって、宗教性の極めて高い事象の「一般化」、あるいは、絵入り印刷物による知的・宗教的営為の「崩し」および「世俗化」により成立した話と結論付けられる。

信仰も含有する高度な文化的営為、換言すれば個人的な営為が、その発生の場所から離れ広がるにつれて「崩れ」ゆき、民俗事象へと変貌するこの論理は、ゲーテ「ファウスト」にも援用可能である。「ファウスト」伝承が、もともとはファスナハトや献堂祭における芝居演目であったことはよく知られている。たとえば、民衆劇「ファウスト博士」(ケルンテン版)には、キリスト像(あるいは十字架像)を描くようファウストから強いられた悪魔が、像は描けても聖名INRIだけは加筆できないというエピソードが存在する。「聖名欠如」の宗教画の描き手を悪魔と見なす、いわゆる「悪魔の筆によるキリスト十字架像」モチーフにおける「聖名欠如」と「悪魔の筆」は、もとを辿れば別々のモチーフであった。このような複数モチーフの結合は、「シンデレラ」話と同じく確かに二次的なものではあるが、結合の結果、民衆の信仰心に響く仕上がりとなったことに異論の余地はない。とはいえ、本来は宗教的な事象の「一般化」、知的・宗教的営為の「世俗化」が、詩人ゲーテの「作品化」により成し遂げられたという点が、口頭伝承により徐々に浸透した「シンデレラ」との決定的な違いであろう。

本書には他にも、シェイクスピアを例とする宮廷演劇における民謡の異化効果、バラード「トゥーレ王」における北方性の論理、シラーのビュルガー批判とゲーテとのつながり等、読者を引き込む多彩な仕掛けが施されているのみならず、20世紀前半のゲルマニスティクおよび戦後のドイツ民俗学が抱えていた、文藝批評および文化研究とナチスドイツとの関係性、さらにその反省の過程と克服の努力にも包み隠さず触れられている点に、学問に対する筆者の誠実な姿勢が感じられる。「書物のなかから〔中略〕数編を集め

た」という控えめな導入に騙されることなかれ。本書の客観的かつ批判的検証の真の目的は、GermanistikとVolkskundeのときとして不平等な関係性に一石を投じ、双方の理想的関係性としての「隣人」愛を説くことにある。なお、論評の都合上、内容紹介が目次の順序に必ずしも沿わなかったことをここにお断りしておく。

(創土社, 2016年)